

## 郷土を再発見する e ラーニング教材制作～佐賀の祭り～

河道 威<sup>1</sup>、穂屋下 茂<sup>2,3</sup>

### Production of e-Learning Contents to Rediscover Native District “A Festival of Saga”

Takeshi KAWAMICHI<sup>1</sup>, Shigeru HOYASHITA<sup>2,3</sup>

#### 要 旨

佐賀県内には、浮立を中心とした祭り（伝統芸能）が数多く残っている。そのほとんどは、各地の神社・寺院に祀られているその地域の守り神「氏神」に、五穀豊穰や商売繁盛を感謝し、天下泰平や家内安全などを願い行われる「神事」である。同時に「神事」という意味だけではなく、その地区に住む人々が集う行事、イベントという意味も持っている。そこには、地域の人々が長年受け継いできた祭りへの強い想いが存在している。また、その歴史や形態を検証することで、それぞれの地域の成り立ちの過程も見えてくる。しかし、近年、地域の過疎化や少子化によって、祭りを担う人材が不足し、祭りの継続が難しくなっている地域が増加している。実際に祭りが途絶えてしまった地域もある。本研究では、佐賀地域の祭りを映像化し教材としてまとめることにより、地域の文化や伝統を振り返るとともに、その祭りの目的や意義を後世に継承することを意図している。制作した e ラーニング教材は、「佐賀デジタルミュージアム」サイトから配信する。

【キーワード】祭り、伝統芸能、浮立、佐賀デジタルミュージアム、e ラーニング教材

#### 1. はじめに

2011年3月11日に起こった東日本大震災は三陸海岸の町や村をことごとく破壊した。家族も家も、職場も失った人々は絶望の淵にありながら、復興が始まった。その復興には、祭りが真っ先に取り沙汰され、クローズアップされた。祭りは、人々が生活を営むところにはどこにでも存在し、人々を集め、絆を深める不思議な力がある。その多くは古来より長きに亘って継承されてきたものである。途中で途切れることもあるし、蘇ることもある。また、時代を反映する新しい祭りが誕生することもある。

日本では、弥生時代より農耕を中心とした社会が形成されてきた。また、祖先の霊（祖

---

<sup>1</sup> 佐賀大学 e ラーニングスタジオ

<sup>2</sup> 全学教育機構

<sup>3</sup> 責任著者

霊)を神聖なものとして崇める「祖霊信仰」を中心として国家が形成されてきた。農耕社会では、収穫量が自然や天候に大きく影響され、直接的に生活に大きな影響を与えてしまう。しかし、自然や天候は人間の力の及ぶ範囲ではない。そこで、神や祖先の霊に祈り、自然や天候の安定を願った。この神や祖先の霊に祈る行為、つまり神事を指す言葉が「祀る」であり、これが「祭り」の語源である<sup>1)</sup>。

「祭り」においては、音楽を奏でたり踊りを踊りながら神に祈ることもあり、その中から伝統芸能も数多く生まれている。例えば、平安時代中期に成立した「田楽」は、田植えに伴う農耕儀礼を母体とした芸能である。田植えの際に歌を歌い、舞を舞って豊作を祈っていたものを、貴族が観賞用として取り上げたことで、芸能として成立した。この「田楽」が「猿楽」を経て、現在の「能楽」へと発展していった。

後に「祭り」という言葉は、神事だけではなく、それに付随した賑やかな行事のことも指すようになった。現在では、神事を伴わないイベント等についても「祭り」と呼ぶようになってきている。

佐賀県内には、浮立を中心とした祭り(伝統芸能)が数多く残っている。そこには、地域の人々が長年受け継いできた祭りへの強い思いが存在している。また、その歴史や形態を検証することで、それぞれの地域の成り立ちの過程も見えてくる。

しかし、近年、地域の過疎化や少子化によって、祭りを担う人材が不足し、祭りの継続が難しくなっている地域が増加している。実際に祭りが途絶えてしまった地域もある。本研究では、佐賀デジタルミュージアムのeラーニング教材「佐賀の祭り」シリーズとして、佐賀地域の祭りを記録し後世に継承することを目的として、祭りの準備から当日までを映像化し記録すると同時に、日本中、さらには世界中へ情報発信し、祭りを民俗学の一つとして学習できる環境を構築していく狙いがある。

## 2. 佐賀地域における「祭り」

佐賀県は、大小様々な「祭り」が数多く残っている地域である。特に「浮立」については、佐賀県内の各地にさまざまな形で残されている。「浮立」とは「風流(ふうりゅう)」が変化した言葉で、「優雅な趣のあること、雅やかなこと」という意味であったが、中世頃から『ふりゅう』と読まれるようになり、祭りの際にきらびやかな衣装を身に付けて歌い踊ることを指すようになった。佐賀県に伝わる浮立には、「面浮立」や「天衝舞浮立」、「鉦浮立」、「武士浮立」などがあり、中でも「面浮立」と「天衝舞浮立」は傳承されている地区が特に多い。佐賀県内の主な祭りの一覧を表1に示す。

表1：佐賀県内の主な祭りの一覧

タイトル	場所	日程
櫛田宮みゆき大祭	佐賀県神埼市神埼町 櫛田宮	4月初旬(隔年)
多久聖廟春季釈菜	佐賀県多久市多久町 多久聖廟	4月18日
呼子の大綱引き	佐賀県唐津市呼子町	6月第1土・日曜日
浜崎祇園祭	佐賀県唐津市浜玉町 諏訪神社	7月第4土・日曜日
小城祇園夏祭り	佐賀県小城市小城町 須賀神社	7月第4土・日曜日
沖の島参り	佐賀県鹿島市、小城市芦刈町より出港～沖の島	8月上旬(旧暦の6月19日)
母ヶ浦の面浮立	佐賀県鹿島市音成母ヶ浦 鎮守神社	9月中旬
武雄の荒踊	佐賀県武雄市 松尾神社・正一位神社・磐井八幡社	9月23日(彼岸の中日)
市川の大衝舞浮立	佐賀県佐賀市富士町市川 諏訪神社	10月第3土曜日
白鬚神社の田楽	佐賀県佐賀市久保泉町川久保 白鬚神社	10月中旬
伊万里トンテントン祭り	佐賀県伊万里市立花町 伊萬里神社	10月下旬
米多浮立	佐賀県上峰町前牟田 老松神社	10月下旬
多久聖廟秋季釈菜	佐賀県多久市多久町 多久聖廟	10月第4日曜日
唐津くんち	佐賀県唐津市南城内 唐津神社	11月2日～4日
竹崎観世音寺修正会鬼祭	佐賀県藤津郡太良町大浦甲竹崎 竹崎観世音寺	1月2日～3日
見島のカセドリ	佐賀県佐賀市蓮池町見島	2月第2土曜日

「面浮立」は、鹿島市を中心に藤津郡、杵島郡、武雄市、多久市、小城市、佐賀市の一部にわたって伝わっている。鹿島市七浦地区の面浮立が各地に広がったと考えられている。シャグマ<sup>\*1</sup>を付けた鬼面を被った『かけうち』と呼ばれる舞人が勇壮に舞う。農耕に害を与える悪霊を封じ込め、豊作を祈願する神事であり、その起源の一説は、戦国時代の龍造寺氏と大内氏の戦の戦勝踊りが起源とも伝えられている<sup>2)</sup>。

「大衝舞浮立」は、佐賀市富士町や川副町など、天山から有明海までの佐賀平野の広い範囲に伝わっている。特に富士町には、市川・杉山・鎌原・古湯・須田の5つの地区にそれぞれ伝承されている。その起源は、佐賀市神野の堀江神社に室町時代より伝わる「浮立玄播一流」とされ、大宮司・山本玄播が行った雨乞い祈願が各地に伝わったと考えられている。特徴は、『テンツキ』と呼ばれる三日月型の被り物で、それを付けた舞人が笛の音や太鼓に合わせて舞い踊る。

鍋島家が統治していた時代の佐賀藩は、質素・儉約を旨としていたが、これら浮立などの祭りは制限を受けていなかった。藩の財政を支える根幹は農業であり、その豊作を祈願する浮立は、大切な神事として藩も認めており、財政的支援を受けるほどであったとされる。そのため、現在まで佐賀県各地で浮立が伝承されているのであろう<sup>3)</sup>。

<sup>\*1</sup> シャグマ：ヤクの尻尾の毛を赤く染めたもの。兜の飾りとして使用していた。

浮立の他にも、「唐津くんち」や「武雄の荒踊り」、「白鬚神社の田楽」、「みゆき大祭」、日本三大喧嘩祭のひとつ「伊万里トンテントン祭り」などがある。珍しい形態のものとしては、秋祭りで狂言を奉納する「高志狂言」や儒学の祖・孔子をお祀りする多久聖廟の「釈菜」（春季と秋季の年2回開催）がある。

### 3. 「佐賀の祭り」コンテンツ制作

「佐賀の祭り」は2010年より制作を着手し、現在、佐賀県内の5つの祭りを映像教材化している。制作したコンテンツの一覧を表2に示す。また、それぞれの祭りの様子を写真1～5に示す。

表2：「佐賀の祭り」制作コンテンツ一覧

タイトル	場所	撮影日
母ヶ浦の面浮立	佐賀県鹿島市音成母ヶ浦 鎮守神社	2010年9月
白鬚神社の田楽	佐賀県佐賀市久保泉町川久保 白鬚神社	2011年10月
櫛田宮みゆき大祭	佐賀県神埼市神埼町 櫛田宮	2012年4月
市川の天衝舞浮立	佐賀県佐賀市富士町市川 諏訪神社	2014年10月
多久聖廟 釈菜	佐賀県多久市多久町 多久聖廟	2014年10月



写真1：母ヶ浦の面浮立



写真2：白鬚神社の面浮立



写真3：みゆき大祭



写真4：市川の天衝舞浮立



写真5：多久聖廟 稲菜

### 3.1 コンテンツ制作の留意点

「佐賀の祭り」を教材コンテンツとして制作する際には、次のような点について留意した。

- (1) コンテンツ制作に当たって、「祭りの歴史・伝統・文化をいかに正しく伝えるか」、「祭りとその地域の人々との関係性」に主眼を置いた。
- (2) 撮影の際には、祭りの全容をきちんと伝えると共に、細部の細かい動きも映像で捉えられるように撮影場所やカメラアングルを工夫した。また、祭りの責任者や出演者のインタビューを取り入れることで、地域の人々の祭りにかける思いなども伝えられるようにした。
- (3) 祭りの本番だけを撮影するのではなく、事前の準備の様子や練習の様子なども含めることで、本番に向けての地域の盛り上がりも伝えられるようにした。
- (3) シナリオ作成の際には、祭りと地域との関係性をわかりやすくするために、その地域の成り立ちや歴史なども絡めて祭りの説明を行うようにした。また、記述内容に誤りや誤解を招く表現がないように細心の注意を払った。
- (4) eラーニングコンテンツとして、長期間利用すること、生涯学習や大学教養教育科目として利用できる質の高いコンテンツを目標とした。

### 3.2 コンテンツ制作作業の流れ

コンテンツ制作の作業の流れは、次の通りである。①「祭り」の選定及び撮影の交渉。②祭りの保存会等の主催者との打ち合わせ。③ストーリーの概略を決定。④撮影。⑤撮影した内容を踏まえシナリオを作成して、⑥編集後、⑦祭りの担当者による映像のチェック。⑧追加撮影を行い、⑨修正（再編集）。OKがでるまで⑥～⑧を繰り返した。OKがでたら、コンテンツは完成。その後、⑩DVD化及びBD（ブルーレイディスク）化。さらに、⑪eラーニングコンテンツ化して、佐賀デジタルミュージアムにアップロードして配信。

## (1) シナリオの作成

祭りの主催者との打ち合わせや事前の調査をもとに、最初の撮影までに大まかな構成を考えておき、取材・撮影した内容を肉付けし、詳しいシナリオを作成した。シナリオは、映像欄と解説（ナレーション）欄に分けた。映像欄には、映像の内容を書き、解説（ナレーション）欄には、映像等に併せたナレーション文を書いた。

シナリオの構成は、主に①祭りの歴史・由来、②地域の歴史、③事前準備や練習の様子、④祭り本番の様子、⑤関係者のインタビューで構成した。シナリオの例を表3に示す。

表3：シナリオの例

映 像	解説（ナレーション）
プロローグ	佐賀県佐賀市富士町市川地区。 稲刈りも終わり、本格的に秋の香りが漂い始めた10月の第3土曜日。 集落中に笛や太鼓、鉦の音が鳴り響いています。 神社の境内で、大きな三日月の被り物をした舞人が、笛や太鼓に合わせ、勇壮に舞い踊っています。 天衝舞浮立。 ここ市川地区で連綿と受け継がれている、伝統芸能です。
オープニング	タイトル
市川地区について ・場所情報 ・成立ちと歴史 ・現在の状況	佐賀市の最北に位置する富士町。脊振山地や天山に囲まれた山間の街で、熊の川温泉や古湯温泉が有名です。 その富士町の東部にある市川地区。 現在は、佐賀郡を経て佐賀市に属していますが、元々は小城郡に属する地域です。 小城を統治していた千葉氏一族の野中和泉守胤廣（のなかいずみのかみたねひろ）が、明応6年（1497年）より移り住み、この地を治めていました。 現在は、およそ60戸の人々が暮らしています。 年に一度、この市川地区の人々が総出で盛り上げるお祭りがあります。諏訪神社の秋祭りです。
天衝舞浮立とは ・諏訪神社とは	市川の諏訪神社は、野中和泉守胤廣の子・伊賀守彦八が信州の諏訪神社から分霊を勧請し、氏神として祀ったのが始まりとされています。 500年を超える歴史があります。 この諏訪神社の秋祭りで、奉納されるのが「天衝舞浮立」です。

<p>・堀江神社 玄播一流</p>	<p>神様へ五穀豊穡を感謝し、天下泰平を祈願するために奉納されます。</p> <p>市川の天衝舞浮立は、佐賀市神野にある堀江神社の「浮立玄播一流」が元になっていると伝えられています。弘治2年（1556年）、雨乞い祈願のために、大宮司・山本玄播（げんば）が奉納したのが始まりとされ、それが何らかの形で、市川地区に伝わったと考えられています。</p>
-----------------------	---

## (2) 撮影

撮影には、S社製のデジタルビデオカメラレコーダー（HVR-Z5J）を使用した。制作した5つのコンテンツのうち、「母ヶ浦の面浮立」と「白鬚神社の田楽」、「みゆき大祭」はSD（標準画質）で、「市川の天衝舞浮立」と「多久聖廟 釈菜」はHD（ハイビジョン画質）で撮影した。

撮影の際は、複数台のカメラで撮影を行った。何をどこで撮影するかで、ビデオカメラの台数が決まる。特に、祭りの場合は、『道行き』と呼ばれる道中行列があるため、行列を追いかけながら撮影する必要が生じる。同時に、祭りの挙行の妨げにならない場所で撮影しなければならない。道中のどこにビデオカメラを配置し、それぞれがどのように動いて撮影を行うか、綿密に計画したうえで撮影に臨んだ。『道行き』での撮影ポジションの例を図1に示す。

また、神社の境内などで奉納を撮影する場合は、①会場全体を固定で撮影するロングショットのカメラと②祭りの出演者をフルショットで撮影するカメラ、③部分をクローズアップで撮影するカメラなどと、それぞれ役割を振り分けて撮影した。特に奉納の踊りのシーンなどでは、ローアングルを多用し、その迫力や躍動感がより伝わりやすいように撮影した。境内での撮影ポジションの例を図2に示す。

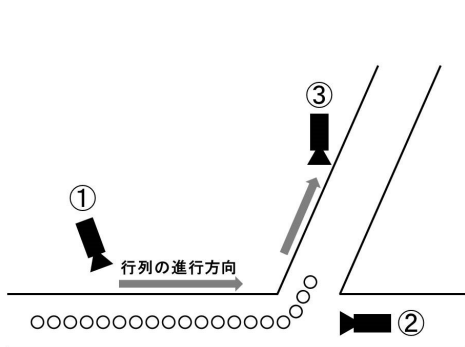


図1：道行きの撮影ポジションの例

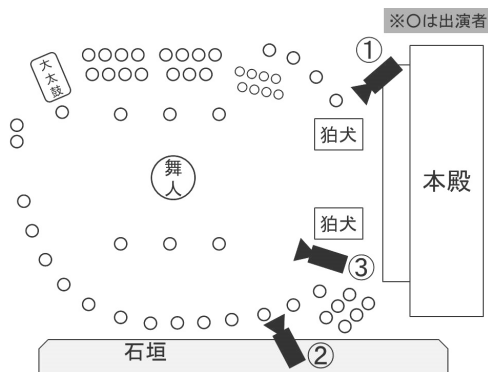


図2：境内での撮影ポジションの例

### (3) 編集作業

作成したシナリオをもとに編集作業を行った。使用した編集ソフトはA社のPremiere（CS5）である。Premiereでは、シナリオに沿って、場面となる映像範囲を選択した。編集作業は、かなりの時間を要する。シナリオに沿って映像が編集できると、ナレーションを収録して映像と合わせ編集する。最後にテロップ・音楽を付け加え、映像として仕上げる。なお、このナレーションはコンテンツの品質に大きな影響を及ぼすので、なるべく雑音を無くして音質を保つためにスタジオで収録した。

編集においては、視聴者に祭りの進行状況をわかりやすく見せることに重点を置き、テロップで注釈を入れたり、映像に図や表などを組み合わせるなどした。また、祭り全体の雰囲気を伝える全体のロングショットと祭り出演者のアップの映像を効果的に組み合わせるようにした。完成した映像の一場面を写真6・7に示す。



写真6：「市川の天衝舞浮立」の一場面



写真7：「多久聖廟 釈菜」の一場面

### (4) 確認作業等

編集作業が終了した段階で、祭りの主催者や保存会の代表の方に、映像の内容に間違いや誤解を招く表現等がないかチェックをして貰った。指摘して頂いた部分は、再度編集し直して、もう一度確認をして貰うようにした。何度かチェックと再編集を繰り返して完成に至る。

## 3.3 配信（佐賀デジタルミュージアム）

完成した映像は、eラーニングコンテンツとして利用できるようFlash化した。映像コンテンツを切り分け、Flashビデオ（FLV）形式に変換した。また、難しい用語も出てくるので、理解しやすいように映像のナレーションとインタビューの部分をテキスト化し、eラーニングコンテンツのテキスト欄に表示した。

作成したeラーニングコンテンツは、「佐賀デジタルミュージアム」<sup>4)</sup>のeラーニングサイトで生涯学習として一般向けに配信している。このeラーニングサイトは、メールアドレスを持っていれば、誰でも登録して受講できるようになっている。



## 4. 「佐賀の祭り～市川の天衝舞浮立～」の制作

コンテンツ制作の一例として「市川の天衝舞浮立」について具体的に説明する。

### 4.1 「市川の天衝舞浮立」とは

「市川の天衝舞浮立」は、佐賀県佐賀市富士町市川にある諏訪神社の秋祭りで、五穀豊穡と天下泰平を願って奉納されるものである。市川地区は、現在は佐賀市に属しているが、元々は小城郡に属する地区であった。明応6年（1497年）に、小城を治めていた千葉氏一族の野中和泉守胤廣（のなかいずみのかみたねひろ）が市川に移り住み、統治するようになった。その和泉守胤廣の子・伊賀守彦八が信州の諏訪神社から分霊を勧請し、氏神として祀ったのが市川の諏訪神社の始まりとされている。

前述のように、「天衝舞浮立」は佐賀市神野の堀江神社に伝わる「浮立玄播一流」が起源とされ佐賀県各地に伝承されているが、「市川の天衝舞浮立」は、それらの中でも最も規模が大きく、古い形態が伝承されている。三日月型の『テンツキ』と呼ばれる被り物を被って勇壮に舞う舞人の他に、笛方・ホンバンウチャー（謡い手）・鉦打ち・パンパコ<sup>※2</sup>・モリヤーシ<sup>※3</sup>・銭太鼓<sup>※4</sup>・扇子舞<sup>※5</sup>といった多彩な出演者から構成されている。また、棒ツキヤー（棒使い）・奴踊り・にわかも披露され、市川地区の人々が総出で盛り上げる伝統行事である。

### 4.2 祭りの本番までの流れ

市川地区は6つの『古賀』と呼ばれる小集落から構成されており、毎年6つの『古賀』が持ち回りで『亭主前（テースマエ）』という浮立の当番を務める。テースマエの中でも中心となる座元を『スブソ』という。撮影を行った2014年のテースマエは『辻古賀』であった。テースマエの中でも中心となる座元を『スブソ』という。市川地区の6つの『古賀』の分けを図3に示す。

奉納が行われる日の1週間前を『初供日』と言い、この日からテースマエの『スブソ』を中心に浮立奉納の準備を行っていく。祭り本番までのスケジュールを表4に示す。また、本番までの様子を画像8～11に示す。

---

※2 パンパコ：未婚女性2名。大鼓を体の前に付け、色紙ふさの付いたバチで打つ。

※3 モリヤーシ：青年男子6名。大鼓を胸の前に付け、小バチで打ちながら踊る。

※4 銭太鼓：少女が務める。竹の中に小銭を入れた銭太鼓を持つ。

※5 扇子舞：幼児から小中学生の女子が務める。日の丸の扇子を両手に持つ。

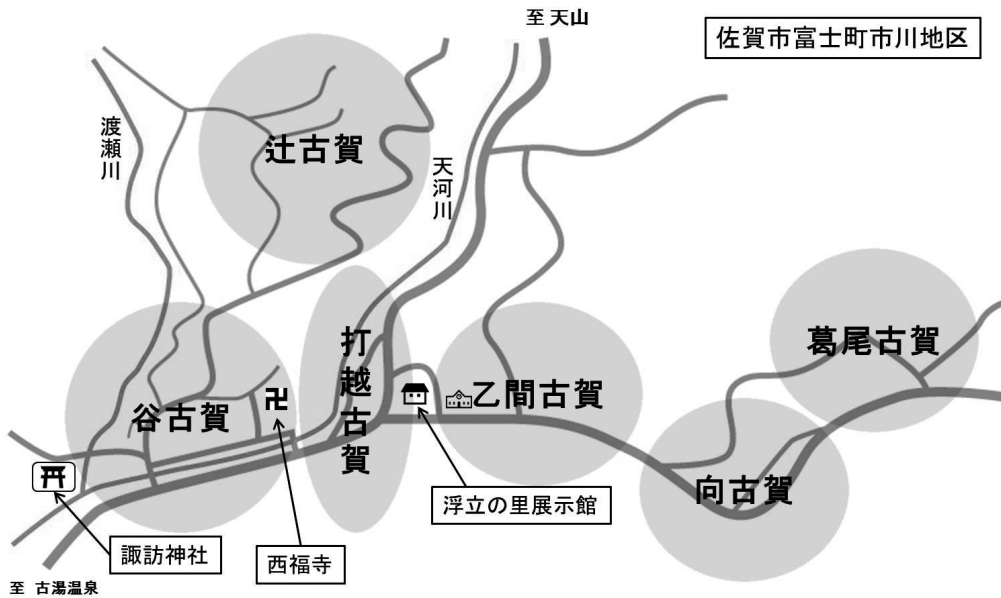


図3：佐賀市富士町市川地区の6つの『古賀』

表4：初供日から祭り本番までのスケジュール

スケジュール	期日	内容
初供日(はつぐんち)	浮立奉納の1週間前	・しめ縄作り、浮立奉納の道具類の新調 ・諏訪神社での初供日の祭典
浮立慣らし	浮立奉納の3日前～前日	・出演者全員での総練習
宵(エー)のまつり	浮立奉納前日	・天衝舞の舞人をスプソが招き、盃を交す ・練習の総仕上げ
禊・足慣らし	浮立奉納当日朝	・舞人は、諏訪神社横の渡瀬川で禊を行い、 境内で準備運動をする



写真8：しめ縄作りの様子1



写真9：しめ縄作りの様子2



写真10：初供日の祭典

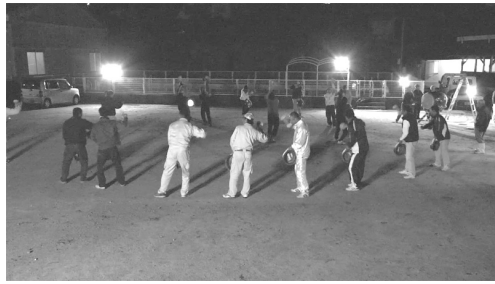


写真11：浮立慣らしの様子

奉納1週間前の初供日の様子から取材と撮影を開始した。撮影においては、それぞれ作業の様子がわかりやすいように撮影するとともに、「年長者から若者へ受け継ぐ技術」というサブテーマを持って撮影に当たった。テスマエが回ってくるのが6年に1回ということもあり、年長者でも作業の手順を思い出しながら、お互い協力して作業を進める様子に、地域の中での結びつきの強さを感じた。また、本番3日前の練習と本番前日の「宵のまつり」、当日朝の舞人の禊の様子も撮影した。練習では、若者に年長者が細かく振付の指導をしており、しっかりと浮立の伝統が継承されている様子だった。子ども達も「棒ツキヤー」や「扇子舞」といった自分達の役の練習を真剣に行っていた。

#### 4.3 祭りの本番

浮立行列の出発、『打ち出し』が始まるのは午後である。準備を終えた出演者たちがスブソの家に集まり、『道行き』の行列が出発する。スブソの家を出発し、市川地区内を回り諏訪神社へ向かう。諏訪神社に到着すると浮立の奉納を行う。奉納の手順を表5に示す。

表5：浮立奉納の手順

	演目	内容
1	棒ツキヤー	小学生～壮年までの男子が棒術の演武を披露する
2	やっこ踊り	「奴」と呼ばれる集団が、歌に合わせてひょうきんな所作で踊る
3	にわか	「にわか連中」と呼ばれる集団が、滑稽な即興寸劇を披露する
4	諏訪大明神奉納浮立	諏訪神社の本殿へ向かい天衝舞浮立を奉納する
5	弁財天奉納浮立	天山の南中腹に祀られている弁財天へ向けて浮立を奉納する
6	寄神様奉納浮立	各所から寄せられた「寄神様」へ浮立を奉納する

諏訪神社での奉納を終えた行列は、西福寺へ向けて『道行き』を行う。市川の天衝舞浮立の特徴は、神社と寺院の両方へ奉納する浮立である。これは、この地を治めた野中氏の氏神が諏訪神社で、氏寺が西福寺であったことに由来すると言われている。西福寺でも、「棒ツキヤー」と「やっこ踊り」の後、天衝舞浮立が本堂と、裏山にある若宮大明神へ向けて奉納される。西福寺での奉納を終えた行列は、スブソの家へと戻り、そこで浮立行列は終了し、『打ち止め』となる。

祭り本番の撮影は、ビデオカメラ3台で行った。道行行列では、2台のカメラは行列を追いかけ、先方と後方を入れ替わりながら撮影した。もう1台は、行列の出發シーンを撮影した後は諏訪神社の境内に待機し、行列の入場シーンを撮影するようにした。奉納の際は、1台は境内の全景を撮影し、1台は神社横の崖の上から出演者の動きを撮影、もう1台は無人正面からのクローズアップを撮影した。諏訪神社境内でのクローズアップ撮影では、予定した撮影ポジションに観客が入って来たり、他のメディアのカメラマンと重なるなどして、思うような撮影ができない場合もあった。出演者と重なって移動せざるを得なくなった場合もあった。主催者側との綿密な打ち合わせが必要であった。

## 5. 考察

祭りやそこで伝承されている伝統芸能を撮影し映像コンテンツ化しておくことは、「民俗学」の領域としても非常に重要であろう。「民俗学」とは、「世界の文明民族の国々で、自国民の日常生活文化の歴史を、民間伝承を主たる資料として再構成しようとする学問」と定義されている<sup>5)</sup>。

祭りはその地域の日常生活と密接に関係している。生活の様式や様々な慣習、しきたり、冠婚葬祭などの儀式の由来を辿れば、祭りや神事に行きつくことが多い。何気なく日常で使用している言葉や慣用語にも、祭りや神事にその由来があるものが多い。

また、祭りの形態を見ることで、日本人の精神性も垣間見ることができる。例えば「市川の天衝舞浮立」では、神道である諏訪神社の祭りでありながらも、仏教（臨済宗）の西福寺へも奉納を行う。これは、日本人が神道と仏教という二つの宗教を同時に取り入れていた、いわゆる神仏習合を表すものである。神社を氏神として、寺院を氏寺として双方を同じように祀り崇拝するという日本人の宗教観が表れている。

このように、映像化したeラーニングコンテンツ教材を利用して、地域の一部となっている「祭り」の意味を学ぶことは、地域住民にとっても非常に重要なことであろう。

## 6. まとめ

(1) 地域の大学が地域で開催される祭りを、教育目的のコンテンツとして制作することは、保存会をはじめとした祭り関係者の方々の協力を得やすいという側面があり、非常に撮影はスムーズにいった。地域の人々も、できるだけ多くの人に祭りについて知って貰い、

実際に現地に足を運んで貰いたいという思いが強いようで、このコンテンツを見て貰うことで、地域の人たちの思いにも応えることができる。

- (2) 祭りの撮影においては、綿密に計画を立てていても、本番は何が起こるかわからず、計画通りに撮影できないなど難しい面もあった。神社などの神聖な場所での撮影のため、立ち入ってはいけない区域などへの配慮も十分に必要である。また、予想をはるかに超える見物客であったり、他のメディアのカメラもいるため、それらとの兼ね合いも考慮しなければならない。
- (3) 撮影しコンテンツ化していく過程では、祭りの意義やその地域の歴史や慣習などを改めて吟味していくが、それにより、時代を追うに従って原型がわからなくなっていたものを、改めて検証し解明することができる。
- (4) 祭り本番に加え、それまでの準備の様子も含め、細部に渡って記録し整理しておくことで、万が一、祭りが途絶え技術が継承されなくなった際も、それを補完することができる。また、その祭りそのものに加え、地域の人々の結びつきの様子、すなわち「地域の絆」を記録として残すこともできる。
- (5) 近年は、高齢化、過疎化の影響が大きく、祭りに携わる人数が減少している。祭りの伝統や技術は確実に受け継がれているものの、昔より祭りの規模自体を縮小せざるを得ない地域も多い。特に子どもが務めるべき役が足りていない地域が多いようである。

## 7. 謝辞

最後に、コンテンツ制作にご協力頂いた、「母ヶ浦の面浮立」「白鬚神社の田楽」「市川の大衝舞浮立」の各保存会、みゆき大祭実行委員会、多久市教育委員会及び公益財団法人 孔子の里をはじめとした地域の皆様、「母ヶ浦の面浮立」と「白鬚神社の田楽」においてコーディネーターとしてご協力頂いたフォトジャーナリストの大塚清吾氏、撮影時の佐賀大学 e ラーニングスタジオのスタッフのご協力に対し、あらためて感謝の意を表す。

### 引用・参考文献資料

- 1) デジタル大辞泉「祭り」：  
[http://dic.search.yahoo.co.jp/search?ei=UTF-8&fr=kb&p=%E7%A5%AD%E3%82%8A&dic\\_id=all&style=full](http://dic.search.yahoo.co.jp/search?ei=UTF-8&fr=kb&p=%E7%A5%AD%E3%82%8A&dic_id=all&style=full) (2016/1/20アクセス)
- 2) 鹿島市HP「面浮立について」：  
<http://www.city.saga-kashima.lg.jp/main/4040.html> (2016/1/20アクセス)
- 3) 富士町史（下巻）(H12. 3. 31発行)
- 4) 佐賀デジタルミュージアム：<http://www.saga-els.com/sdm/>
- 5) デジタル大辞泉「民俗学」：  
<https://kotobank.jp/word/%E6%B0%91%E4%BF%97%E5%AD%A6-140105> (2016/1/20アクセス)